国際シンポジウム

「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」開催について（案内）

主催

愛知大学国際中国学研究センター

北海道大学東アジアメディア研究センター

Ｉ．趣　旨

2009 年 12 月 19～20 日、愛知大学国際中国学研究センターと北海道大学東アジアメディア研究センターは共催により、愛知大学名古屋校舎（愛知県西加茂郡三好町）で「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」をテーマとする国際シンポジウムを開催する。

このテーマについての関心と研究の進行程度は、分野によって異なっている現状にある。本シンポジウムでは経済（農業経済、国際経営）、政治・外交、メディア、環境、文化、社会要因の６つの分野から対外進出する現代中国の背景、実態および今後の動向を探り、その国際社会への影響と国際協調のあり方を論じたい。

現代中国の国際的影響力の拡大に関する議論は個別分野的には散見されるが、本シンポジウムの場合は多様な分野から議論し、その総合的な集約を試みる点に特徴がある。

以下簡単に、本テーマを設定した背景を説明する。

経　済

改革・開放以来、中国は高い経済成長を続け、現在は生産と消費の両面で世界経済の牽引役として国際的注目を集め、アメリカに次いで世界第二の貿易大国に躍り出た（輸出額は世界一）。また 2008 年に中国が対外的に行ったＦＤＩは 406 億ドル（金融を除く）に達し、我々がこれまでの研究で予想したとおりの急速な拡大となっている。2008 年の場合には、中国が世界金融危機の影響を受けたため海外へ資金が流出したという特殊な背景もあるが、傾向的には、今後もこの基調は変わらないと見ることができる。

中国は潤沢な資金力を背景に海外との連携を深め、資金のみならずヒト、モノの面においても、経済面の国際的影響力を増していく可能性が高い。

政　治

国際政治舞台においても、国連やアジア・欧州会議（AEM）、ASEAN 地域フォーラム（ARF）、上海協力機構（SCO）などの場で、中国は組織力と発言力を日増しに高めつつあり、正式メンバーではないもののＧ８サミットではＢＲＩＣＳを代表する不可欠の存在となっている。いわゆる６カ国協議の議長国としても、日米韓対北朝鮮という対立構造を緩和し協議の進展を図る努力を注いでいる。また 7 月の米中戦略対話において、両国は相互の世界における重要性を確認しあった。

こうした動向は、現代中国の存在を国際社会がどのように位置づけるかという議論を生

み出す背景となり、この点に対する高い国際的関心を集め始めている。

国際世論には懸念も見られる。2009 年の国防予算が前年実績を 14.9%上回る 4,806 億元（約 6 兆 9,000 億円：全人代発表）に達し、日本の同年の予算規模 4 兆 7,028 億円を大きく上回るなど、透明性の確保が課題となっている。このような課題が生まれること自体、国際社会における中国の影響力の高まりを反映したものといえる。

メディア

テレビ、新聞、雑誌、インターネットなど多様な方法により、現代中国の各分野についての情報が世界を駆け巡り、それを通じた中国の実態理解に貢献する一方で、正確な報道確保や誤解を与えない情報伝達の努力が求められている面もある。

現在、中国の情報を世界に発信している主なものとして、ＣＣＴＶ国際放送、「人民日報」海外版、『人民中国』海外版など多数あるが、その多くはインターネットを通じて多様な言語で、瞬時に手にすることができるものとなった。

また、政府や放送局を通じたいわばオフィッシャルな情報だけでなく、庶民の多様かつ多数の生の意見を知ることもできる。ここに、こうしたメディアを通じた、現代中国に関する国際世論形成やその国際的影響力の拡大への方法的な実践、世界一のインターネット人口を媒介とする国際社会との交流機会の形成を見ることができる。

環　境

中国の二酸化炭素排出量は 56 億 4,900 万トンで、アメリカの 56 億 9,700 万トンに、ほぼ肩を並べる水準である。ちなみに日本は、12 億 1,300 万トンである（以上の数値は 2006 年、IEA CO2 Emissions from Fuel Combustion、2008 年版）。

中国は、一人当たりで計るとアメリカの３分の 1 以下であり、現在までの累積値ではさらに少ないとする見方もあるが、総量としてはアメリカを超え、今後は世界一の排出量となる見通しである。

また、草原の砂漠化の拡大による黄砂や温暖化への影響、国際河川や沿岸海洋汚染も無視できない状態が報告されている。

これら多くの環境問題は中国国内から生じているが、その現状を現地調査等で把握・整理すると同時に、国際的影響への配慮を行うことが大きな課題となっている。

文　化

中国の多様な文化の普及は世界史的なものであるが、その多くは華僑・華人が長い期間をかけて随伴したものか、外国人による能動的学習やその取得が伝播または定着したことによるものである。

最近においてもこうした形が基本的ではあるが、孔子学院に見られる漢語の国際的普及政策の動きのように、中国の国家的意向が働いているものも生まれている。またアジアでは中国映画や中国発若者音楽などに惹かれる動きも見られ、これが恒常化する傾向もうかがわれる。この場合は民間興業的な性格を持つと見てよいが、古い時代の中国のイメージを塗り替える転換点にさしかかっている。

文化と一口に言っても多様な内容を含んでおり複雑であるが、中国に対する国際社会の持つイメージや認識の変化を背景とする自然な流れともいえる。こうした現代中国の文化的影響が、国際社会ではどのような意味を持つのかについて関心が高まっている。

社会要因

現代中国社会が国際的に、影響を与えているものは何か、というのは極めて困難な研究課題である。たとえばアメリカ社会が与える国際的影響を例にとって見れば、その違いは明らかである。現代アメリカ社会は、政治機構から産業経営、生活スタイルまで多くの分野でアメリカン・スタンダードを国際スタンダードとし、あるいはそれを政府自身がリードして適用・普及させ、途上国社会をアメリカナイズしようとする姿勢さえ見受けられる。

その背景になっているものは、大衆消費社会と物質文明、アメリカ的な民主主義思想である。現代中国社会もその一部を受容しつつあり、対外的にその固有の思想・文化を積極的に発信するよりは、受け身の姿勢と見る方が実態的である。また深刻化するさまざまな社会病理現象も、現代中国自身がその近代化に伴って生み出した問題という側面を持っている。

では現代中国には、対外的影響を与えるような社会要因は存在しないのだろうか。

中国が官民挙げて推進する海外留学生の推進と労働移出は、受け入れ国に多様な影響を与える社会要因の一つとなっていると考えられる。中国は華僑・華人の 1000 年以上に及ぶ歴史的経験を積む過程で、文化とともに、「中国社会」そのものの移出を行ってきた国という言い方も可能である。その形跡は多くの国で、いわゆる中華街やチャイナ・タウンあるいは中国人コミュニティという形でうかがい知ることができる。

中国人以外の場合には、概して現地融合化を図ろうとする共通性が見られる。この点で、中国人は、タイやメキシコなどで現地融合化が進んでいることも事実であるが、なお世界で最も多数の海外移住者を輩出するアイルランド人、そしてインド人や日本人などとは異なった状況におかれている。

注:「文化」、「社会要因」という用語は一般的な意味合いで使っているが、参考までに付記しておきたい。
文化：社会の成員である人間が取得した知識、信条、宗教、社会的心理、芸術、法、道徳、慣習、習俗、儀礼、生活様式など。
社会要因：社会成員間の相互コミュニケーション行為、その相互行為の維持、社会成員の組織化、成員と非成員の区別と境界を形成し、あるいは揺るがすもの。

Ⅱ．シンポジウムの視角

シンポジウムでは以下の視角に配慮しながら、現在までの先行研究等を参考にしつつ各分野の個別報告を行い、全体会議でおおまかな議論の集約を図る。

（１）現代中国の国際的影響力の拡大の現状と方向性（これによって分野ごとの実態、全体から見た各分野の特徴を把握することを試みる）

（２）総合的な視点から国際的影響力を増す中国を国際社会のなかで、どのように位置

づけるべきなのか（その研究方法的検討を含む）

Ⅲ．シンポジウムの概要

（１）プログラム

■12 月 19 日（土）

10：00～10：05　　開会挨拶（佐藤元彦　愛知大学長）

10：05～10：30　　趣旨説明（高橋五郎　愛知大学国際中国学研究センター所長）

10：45～11：15　　分科会報告①

11：15～11：45　　分科会報告②

11：45～12：15　　分科会報告③

-----<12：15～13：00　休憩＞------

13：00～13：30　　分科会報告④

13：30～14：00　　分科会報告⑤

14：00～14：30　　分科会報告⑥

14：30～15：00　　分科会報告⑦

15：00～15：30　　分科会報告⑧

-----<15：30～15：45　休憩＞------

15：45～16：15　　分科会報告⑨

16：15～16：45　　分科会報告⑩

16：45～17：15　　分科会報告⑪

■12 月 20 日（日）

10：00～10：30　　分科会報告⑫

10：30～11：00　　分科会報告⑬

11：00～11：30　　分科会報告⑭

11：30～12：00　　分科会報告⑮

-----<12：00～13：00　休憩＞------

13：00～14：00　　全体検討会（分科会概要報告）

14：00～17：00　　全体検討会（質疑応答、まとめ）

17：00～17：05　　閉会挨拶

（２）使用言語

日本語、中国語（逐語通訳あり）

（３）報告者

愛知大学国際中国学研究センター	12～13 名
北海道大学東アジアメディア研究センター	5 名
国内招聘者	4 名
海外招聘者	4 名
自由参加者（海外からの参加希望者も歓迎）	4 名

（４）開催形式

二分科会方式

第一分科会：（報告者 14～15 名）

第二分科会：（報告者 14～15 名）

（５）会場

愛知大学名古屋校舎

〒470―0296　愛知県西加茂郡三好町黒笹 370

TEL 0561-36-1111（代表）